

<実践報告>

## 日系人のハイブリッド性に着目した授業実践 －視覚的な手法を用いて－

徳井厚子 信州大学学術研究院教育学系

### A Practice of Multicultural Education Focused on Hybridity

TOKUI Atsuko: Institute of Education, Shinshu University

研究の目的	視覚的な手法を用いて日系人のハイブリッド性を明らかにすること。
キーワード	視覚的な手法 ハイブリッド性 日系人 多文化教育
実践の目的	視覚的な手法を用いた「日系人」理解のための多文化教育
実践者名	著者と同じ
対象者	信州大学教育学部生 50名
実践期間	2017年10月
実践研究の方法と経過	<ol style="list-style-type: none"> <li>1) 日系人のイメージについて記述し、絵を描く。</li> <li>2) 1) で描いた絵を共有する。</li> <li>3) ハワイのビッグ・ファミリーの写真を見せる。</li> <li>4) トランスナショナルな存在としての日系人の定義を読む。</li> <li>5) 1)～4) を踏まえ、感想を書き共有する。</li> </ol>
実践から得られた知見・提言	<p>イメージについて絵を描き、写真を用いるという視覚的な手法を用いることで、「日系人」についてのイメージと実際のハイブリッド性を持つ日系人のギャップに気づくことにより、自己のステレオタイプに気づき、自らの批判的な問い直しにつながった。こうした問い直しが批判的な能力の育成にもつながり、多様性への理解にもつながったのではないかと考える。</p>

## 1. はじめに

法務省によれば、2017年末の日本国内の在留外国人の数は、2,561,848人と過去最高になっている（法務省 2018）。現在、国内では在留外国人の数は急増している。それに伴い、学校教育の現場も多文化化しつつある。このような中、教員養成においては多文化化する現場に対応していく教員の養成が必要となってくると考えられる。その中でも多様性にどう向き合っていくかについて考えていくための授業は一つの重要な課題だろう。

バンクス（2006）は、多様性を教育の中で扱うことの重要性について以下のように述べている。

すべての民主的社会における市民性教育は、人種、階層、エスニシティ、宗教、ジェンダー、言語、障害、性的指向などの主要な社会的カテゴリーに関連した問題や疑問について、生徒が考えられるように支援することが大切である。

バンクスは、こう述べた上で、幾つか検証していく必要性を述べているが、その一つとして「異なる民族の構成員が、個人の多様なアイデンティティをどのように扱ってきたのかを検証する必要がある」ことを挙げている。バンクスの述べるように多様性をテーマとして扱っていくために、個人の多様なアイデンティティに焦点を当てていく方法は、多文化化していく教育現場に対応する教員養成において必要であるといえるだろう。特に、多様なアイデンティティの実態に焦点を当てていくためには、ハイブリッド性（異種混交）に注目していく必要があるだろう。

当報告における授業実践は、信州大学教育学部における授業「多文化教育方法論」の授業の中の一部で行った日系人のハイブリッド性をテーマにした実践である。国内でも日系人は多く見られるが、その存在についてはあまり明確に意識されたことはなく、実際には様々な血が入りハイブリッドな存在であるということについてもあまり知られていない。

「漠然としたイメージ」しかない日系人について、改めて意識化し学ぶことは、自身の持つステレオタイプやカテゴリーをクリティカルに問い直していく力を育成することにつながる。批判的に問い直す力は、多文化化していく現場に対応していく教員にとって重要な力であると考えた。さらに、クリティカルに問い直していくプロセスにおいて、写真や絵というビジュアルな手法を用いていくことは、より意識化を高めるという意味で必要ではないかと考えた。なお、当実践は森茂・中山（2008）を参考にしている。

当報告においては、日系人のハイブリッド性をテーマにした授業実践の報告を行いその効果について考える。

## 2. 実践の概要

### 2.1 授業「多文化教育方法論」の概要

当報告における実践「日系人のハイブリッド性をテーマにした実践」は、授業「多文化教育方法論」の中の1回分で行った実践である。ここでは、まず、授業「多文化教育方法論」の概要について述べる。

当授業は、多文化化する学校教育の現場に対応する教員の養成を目的としている。当授業の達成目標は、「日本の国際化や社会制度について幅広く知識を身につけることができるようになる」であり、授業のねらいは、以下の通りである。

日本の国内における内なる国際化の現状について、歴史的、社会制度的な面も含め習得する。教育現場における実践方法を習得する。

授業の具体的な内容は、言語サービス、アイヌの歴史と現在、在日韓国朝鮮人の歴史と教育、日系ブラジル人の歴史、日系人のハイブリッド性、学校教育の実践への応用等を扱っている。

## 2.2 「日系人のハイブリッド性をテーマにした授業」実践の概要

当報告の実践は、森茂・中山（2008）の実践をもとにした上で、さらに視覚的なイメージを絵にするという作業を加えたものである。

森茂・中山（2008）は、『日系移民学習の理論と実践』の中で、実践事例として「六世が誕生したハワイのビッグ・ファミリーを読み解く」という授業実践案を挙げている。森茂らの実践は、ある一枚の写真を読み解くことから始めている。この実践に用いられている写真は、JICA 横浜海外移住資料館に所蔵されているものであり、2002年にハワイで撮影されたものである。この写真に移っている六世の子どもは、日本の他に、中国、フィリピン、ドイツ、アイルランド、ポルトガル、タヒチ、サモアにルーツを持っている。

森茂らの実践では、この写真を生徒たちに見せ、「この写真に登場する人たちの人種に着目しながら、あなたがこれまで抱いてきた日系人イメージとの違いについて、自由に意見を述べなさい」という課題を出している。森茂らは、「この写真は、日本社会が抱く日系人イメージを打ち砕き、人種的にも民族的にも多様化しており、文化もハイブリッド化していることを示している」としている。さらに、森茂らは日系人の定義について、以下の定義を紹介し、日系人をトランスナショナルな存在として規定されているとしている。

すべての日本人移民とその子孫を含め、日本人の血を引くことを認めながらも、アメリカ大陸のそれぞれの定住国特有の環境のなかで独自のコミュニティを形成した人たちを指します。また、他の人種の血が混じっていても自分を日系人であると認識している人、日本へ帰っても、生粋の日本人とは異なるアイデンティティをもち続ける人たちもこれに含まれます。（アケミ・キクムラ＝ヤノ 2002）

本実践においても、森茂らの実践にもとづき、「ハワイのビッグ・ファミリー」の写真を用いる。ただ、本実践では、森茂らが行った写真を見せその後自由に意見を述べるという方法ではなく、写真を見せる前に「日系人のイメージ」について各々が絵を描き、イメージについて記述するという作業を取り入れた。写真を見せる前に自己の持つイメージを視覚化することで、自己の持つステレオタイプと向き合い、クリティカルに自身の見方について問い直すことができるのではないかと考えたからである。

本実践の手順は、以下の通りである。

- (1) 日系人のイメージを記述し、絵をそれぞれ描き、共有する。

- (2) 「ハワイのビッグ・ファミリーの写真」を見せる。
- (3) トランスナショナルな存在としての日系人の定義を読む。
- (4) 実践(1)で描いた絵とイメージの記述と、(2)の写真および(3)の定義をふまえ、各自感想を書き共有する。

### 3. 実践結果

#### 3.1 実践(1)日系人のイメージの記述

学生の記述した日系人のイメージは、以下の通りである。容貌に言及したものが最も多く、次いで「血が入っているか」に言及したものが見られた。また「アイデンティティ」に言及したものはほとんど見られなかった。

学生が実際に描いた絵は、以下の容貌に言及したイメージを具体化したものがほとんどであった。以下にイメージの記述の一部を記す。

##### 【容貌に言及したもの】

目が奥二重、鼻は高くない、眉が太い、唇が厚い、背が高い、目が二重、ひげを生やしている、目が大きい、顔のつくりが浅い、目の色が異なる

##### 【血が入っているかどうか】

祖先に日本人がいて日本人の血が入っているが外国籍を持つ人

##### 【アイデンティティ】

アイデンティティは日本人ではない

上記の記述から、日系人のイメージはほとんどが容貌から形成されていることがわかる。学生の記述したイメージの容貌は、「いかに日本人と異なった顔のつくりをしているか」について焦点をあてたものが多く、類似点に言及しているものはほとんど見られなかった。

「日系人」のイメージを思い描く場合、異質な存在として捉えていること場合が多いことを示唆しているといえる。

3.2 実践(1)で描いた絵とイメージの記述と、(2)の写真および(3)の定義をふまえ、各自感想を書き共有する。

学生の記述からは、「イメージとのギャップ」「多様性への気づき」「クリティカルな自己の問い直し」「教育方法の示唆」「ハイブリッドなアイデンティティの気づき」「視覚的な学びの重要性の気づき」「多様性を超えたアイデンティティの気づき」「カテゴリーの問い直し」「地域での多文化共生社会の実現の必要性」などが見られた。

以下は学生の記述とその考察である。

##### 【イメージとのギャップ】

私が今まで持っている日系人のイメージは、「日本人の顔立ちをした日本以外に住んで

いる人」だったが、人種的にも民族的にも多様化していると知り、驚いた。今回の講義で「ビッグ・ファミリー」の写真を使うことで、今まで日系人についてのイメージが変わり、子供たちも日系人を知ろうという意識が芽生えると思う。

日系人についての自己のイメージが変化したという記述である。最初に日系人のイメージについて言語化し、絵を描くという作業を行ったことで、自己の持つ日系人のイメージを意識化することができ、「ビッグ・ファミリー」の写真と自己のイメージとのギャップについて感じ取ることができたのではないかと考える。

### 【多様性への気づき】

基本的に、私の周りの人は外見も文化も日本人である人は多い。だが、日系人はそのルーツや文化が非常に多様であることに驚いた。日系人がもともと抱いていたイメージは、外見は日本人であるものの、文化などは日本に由来したものを持っていると思っていたが、文化や言語も多様であった。

最初のイメージでは、日系人のイメージにおける「外見」や「文化」について「日本」vs「外国」という二項対立の括りで捉えていたが、実際は文化や言語が多様であるということへの気づきが見られた。最初のイメージ化の作業では、二項対立で捉えていたのが、その後の写真や定義の学びを通して、日系社会への多様性に気づき、ハイブリッド性という捉え方に変化したことがわかる。

### 【クリティカルな問い直し】

なんとなく単語だけ知っているということはよくないことだと強く感じた。これからは知っているような気持ちにならずにちゃんと自分の言葉で説明できるようにならなければならないと思う。

自分自身について、曖昧な知識のまま「わかったつもりになっていた」ことが危険であるということについて日々の実践をクリティカルに問い直し、「理解すること＝言葉にできること」と捉え直している記述である。日系人というテーマを超えて、自分自身の理解の仕方そのものをクリティカルに問い直している。

### 【クリティカルな問い直しから教育方法への示唆へ】

なんとなく捉えていた物事についていざ言葉や絵にしようとするると具体的に浮かばず、「自分」が知らないということに出会い、追求したいと思った。子どもに〇〇とは△であると教えることは簡単であるが、〇〇とは？と問いかけることで、当人たちが考え知らないということに出会えるし、たどり着く答えも印象的になるだろうと思った。自分が積極

的に学ぶことはもちろん、学んだことが子どもたちの中に残るようにするための工夫について考えることも大切なのではないかと思う。

イメージの記述や絵を描く作業を取り入れたことで、自分自身の知識の曖昧さを意識化したことが記されている。自己についてのクリティカルな問い直しから、さらにその問い直しを超えて、さらに将来の教育現場での課題に繋げている。あらかじめ答えを用意するのではなく、「問い」を立てていくことで、主体的な学びにつながるのではないかと考察している。授業での実践を通して得たことを自身の今後の教育実践の課題につなげている。

**【ハイブリッドなアイデンティティ、ステレオタイプを脱却する学びの重要性、視覚的な学びの重要性への気づき】**

ビッグ・ファミリーの写真を見た時私が想像していた日系人のイメージと異なっていた。日本だけでなく多様な血が混ざっていることに驚いた。こういったステレオタイプ的なイメージを打破するために、実際に写真を見たり、文章を読むという経験を通して知識を得ることが大事なのだと感じた。

写真を通して、最初のイメージと異なり、日系人のハイブリッドなアイデンティティに気づいたということへの気づきが記されている。さらに、こうしたステレオタイプを打破するために視覚的な方法で学ぶことの重要性が述べられ、「気づき」だけではなく、「学び方」についても言及されている。

**【多様性を越えたアイデンティティへの気づき】**

ビッグ・ファミリーの写真を見ると、いろいろな民族の血が混じっていることで、6世そろそろ顔の雰囲気皆違うように感じますが、一つの家族であるということに変わりはないし、何より、多文化が一つになっているような感じがして、見ていて温かいなと思いました。差別的な問題に取り上げられることもあります。日本人、日系人を判断する材料として見た目を重視してしまう風潮を変えられればよいのかなと感じました。

写真を通して、多様性を越えたアイデンティティへの気づきが見られたという記述である。気づきにとどまらず、現在の社会の問題についても視点を広げ、さらに見た目で判断することへの批判的なまなざしについても記されている。

**【カテゴリーの問い直し】**

自分が自分らしく生きるのに分類（カテゴリー）なんて無意味だと思う。

カテゴリーそのものに対する批判的な問い直しをしている記述である。実践を通して「〇

〇人」という境界を持ったカテゴリーに対して、批判的なまなざしを向けている。これは同時に、ハイブリッドなアイデンティティへの気づきについて示唆しているといえる。

#### 【日系人についての学びへの意欲】

日系人がいることは知っていたが、具体的にどんな人なのかはイメージしかなく、今までの日本人にとって大切なことであると思う。なぜ日本から出ていったのかその先での彼らの生活はどのようなものであったか、また現在の日系人はどのくらいいてどのように生活しているのか、日系人についてもっと知りたいと思った。

日系人についてのイメージが漠然としていたということへの気づきの記述にとどまらず、日系人の歴史や現在の日系人の生活への興味と関心へとつなげている。さらに、これらについての学びへの意欲について記述している。

#### 【多文化共生社会の実現の必要性】

日本にルーツのある日系人と協力してコミュニティをつくっていくにはどうしたらいいかということを考えていきたい。

日本にルーツのある日系人を単なる学習の対象として捉えるのではなく、現在住んでいる同じ地域コミュニティの一員として捉えている。そして、具体的にどのように日系人とコミュニティで共生し、共にコミュニティを創りあげていけばよいかについて考えている。教室での学びにとどまらず、社会への貢献へと広げて考察している。

#### 【日系人との関わりの必要性】

日系人とはあまり関わったことがなく、距離的にも遠い存在であると思っていたが、日本にもいたり、年がたつほど人数は増えていくので、これからもっと関心を持つようにしたいと思った。

実践を通して、これまで「関わりがなく、距離的にも遠い」存在であった日系人が、身近な存在として感じられるようになったという記述である。教室での学びを超えて、身近な地域社会における日系人への関心へと広がったといえる。

## 4. まとめ

本実践は、「絵」と「写真」という視覚的な材料を用いながら、日系人のハイブリッド性について考えることを目的とした実践である。ハイブリッド性における異種混交の気づきは、「異」と「自」という二項対立的なカテゴリーや「異」の境界を超える視点を持つこと

につながる。このことは多文化教育にとって重要な視点の一つである。

本実践では、「日系人のイメージ」と「実際の日系人ビッグ・ファミリーにみるハイブリッド性」とのギャップを促すために、「写真を見せる」という段階の前に、「日系人のイメージについて絵を描き、記述する」という実践を取り入れた。この実践を前段階として入れることにより、自己の持つステレオタイプについて意識化するとともに、自己への批判的な問い直しができただのではないかと考える。自己を批判的に問い直し、自身の持つステレオタイプに気づくことは、批判的能力の育成につながるといえるだろう。また、描いた絵の共有を通して、「日系人」のイメージに多様な解釈があることに気づき、異なった理解の可能性を開こうとする態度の育成にもつながると言えよう。

今回の実践では「写真」「絵」という視覚的な手法を用いたが、こうした視覚的な手法を用いる実践は、具体的なハイブリッド性への理解だけではなく、自己の持つ「日系人」への漠然としたイメージを視覚化するという作業を通してそのイメージの曖昧さへの気づきを促すという役割も果たしている。視覚的な題材は「受信」だけではなく「発信」の過程にも学びがあるといえるのではないかと考える。

本実践は、日本の一大学における教員養成の一環として行った授業での実践であるが、日本に限らず、実際に日系人の多い南米、北米等の大学における教員養成課程でも実践が可能であろう。

本実践は、まだ試行錯誤の過程であり、実践においては、絵を描く際になぜそのような絵を描いたのか内省を促す等いくつかの課題が挙げられるが、これらは今後の課題としてい。

謝辞：当報告をまとめるにあたり、学会等でコメントをくださった方々に心より御礼申し上げます。

## 文献

バンクス、ジェームズ他、2006、民主主義と多文化教育、平沢安政訳、明石書店  
法務省 HP 在留外国人統計(2017年12月調査)

[http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei\\_ichiran\\_touroku.html](http://www.moj.go.jp/housei/toukei/toukei_ichiran_touroku.html) (accessed 2018.9.1)  
森茂岳雄、中山京子、2008、日系移民学習の理論と実践—グローバル教育と多文化教育をつなぐ、明石書店

(2018年9月14日 受付)